

2点A, Bを通る直線上の点Pへのベクトル $\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad s+t=1$

直線のベクトル方程式を利用すると、2点A, Bを通る直線上の点Pへのベクトルが

$$\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad s+t=1$$

と表されることが証明できる。

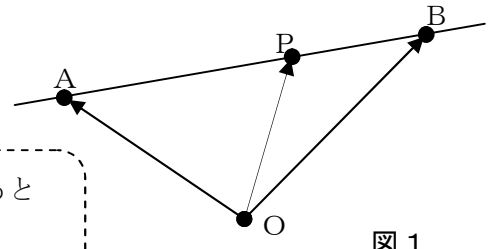


図1

証明 通る点として点A, 方向ベクトルとして \vec{AB} とすると

$$\vec{OP} = \vec{a} + t\vec{AB} \quad \text{よって, } \vec{p} = \vec{a} + t(\vec{b} - \vec{a})$$

$$\vec{p} = (1-t)\vec{a} + t\vec{b}$$

$$\text{ここで, } s=1-t \text{ と置くと, } \vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad s+t=1$$

この証明の後、内分、外分の公式を利用して、以下のように説明して理解を深めるとよい。

証明 ABを $m:n$ に内分する点をPとすると、

$$\vec{p} = \frac{n\vec{a} + m\vec{b}}{m+n} \quad \text{となる。この式を変形して, } \vec{p} = \frac{n}{m+n}\vec{a} + \frac{m}{m+n}\vec{b}$$

$$\text{ここで, } s = \frac{n}{m+n}, t = \frac{m}{m+n} \text{ と置くと}$$

$$\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad s+t=1$$

この証明を利用すると、

$$m:n = \frac{m}{m+n} : \frac{n}{m+n} = t : s = t : 1-t$$

つまり、点Pが直線AB上にあるとき、 $\underline{AP : PB = t : 1-t}$ とおけることが分かる。

【指導上の留意点】

$\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad s+t=1$ が成り立つとき、点Pは直線AB上にあることが分かるが、次のように○と□でまとめ直すと活用しやすくなる。

まとめ

点Pが直線AB上

$$\vec{p} = \text{○} \vec{a} + \text{□} \vec{b}, \quad \text{○} + \text{□} = 1$$

(例) 点A(\vec{a}), B(\vec{b})に対して、 $\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b}$, $2s+3t=4$ で与えられる点Pの存在する範囲を求めよ。

(解) $2s+3t=4$ より, $\frac{1}{2}s + \frac{3}{4}t = 1$

$$\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} = \frac{1}{2} \cdot (2\vec{a}) + \frac{3}{4} \cdot \left(\frac{4}{3}\vec{b}\right)$$

これによって、点Pは二つのベクトル

$2\vec{a}$, $\frac{4}{3}\vec{b}$ の終点を結ぶ直線上にある。

$\frac{1}{2}s + \frac{3}{4}t = 1$
 $\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b}$ を変形して、○ と □ を強引に作る。

$$\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} = \left(\frac{1}{2}\right)(2\vec{a}) + \left(\frac{3}{4}\right)\left(\frac{4}{3}\vec{b}\right)$$

不等式の領域を求めるときは、次のように小問を解かせてまとめると効果的である。

(1) $s+t=2$	(2) $s+t=3$
(3) $s+t=\frac{3}{2}$	(4) $2 \leq s+t \leq 3$